
さよなら三角

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら三角

【著者名】

鹿の子

N5798P

【作者名】

【あらすじ】

子どもの頃のどうしようもない気持ちを書きました。自サイトでも公開中。

子どもって、じつじょりもない。

親のお金で生きているんだからじょりがない。

引っ越しなんてしたくない。

絶対に。

「ほら、真美。新しい家を見に行くぞ!」

週末になるとお父さんは、車に私と母と弟を乗せて新しい家を見に行く。

お父さんは、事業で成功した。

だから、そのお金でとてもなくでかい家を建てた。

四人で住むのに、部屋が七つもあった。

トイレも一つ。

庭には池があつて（鯉を今度貰つてくれるって言つてた）、緑色の芝生も生えていた。

お茶室もあつて、「水屋」つていうのまである。

お風呂も一つ、おまけにサウナまであった。

掃除機なんて、ノズルを各部屋の壁にある穴に差し込んでスイッチを入れると使えるようなもので（つまり掃除機をガラガラと押すことはない）妙な感じだった。

まだ、コンクリートが乾かないとかで、入居はしていない。
そんながらんとした家の中を、弟は走り回っている。

「真美、凄いだろ? お父さん、がんばつただろう。おまえたちが転校しなくてもいよいよにこの土地を見つけたんだぞ」

誇らしげなお父さんのそんな顔を見ていると、むかついてくる。

「家なんて、建ててなんて言つてないもんね」

「こり、真美、とお母さんが言'。

お父さんも顔をしかめる。

「転校しなくていいなんて、そんなの誤魔化しじゃん。だって、本当は」こって隣の学校の学区域だよ。越境じやん。嘘つき

そんな言葉を言い捨てて、自分の部屋に走つていく。

部屋は田当たりがよくて、おまけに部屋からバルコニーに出られた。

窓からは梅の花が咲いているのが見えて、とてものどかな風景だつた。

でも、私の心は真黒な嵐がぐるんぐるんに吹き荒れていた。

「新しい家なんて、欲しくない」

大きい家になんて住みたくない。

今、あの路地にある、小さな家が大好きだつた。
木の階段とか、昇ることが出来る屋根の上とか。

そして、路地に並んだ家々。

大好きな由美子ちゃん、咲ちゃん、庸ちゃん、友くん、淳ちゃん。

そして、初めて好きになつた、今でもとつてもとつても大好きな祥くん。

あの場所に、私はいたかつた。

大事なのは、人だつた。

場所だつた。

たくさん遊んで、いたずらをして。

真つ暗になるまで遊び呆けた、そのことだつた。

いくら大きくて、立派でも。
こんな家。
ちつとも欲しくない。

お父さんなんて。
お父さんなんて。
全くなんにも分かつていないんだ。

私たちの為に、なんて。
そんなの嘘だ。

自分が建てたいから建てたのに。

恩着せがましくそんなことを言うのが、嫌だ。

家も、お父さんも大嫌い。

嫌い。

「お姉ちゃん」

走り回っていたはずの弟が部屋の扉を開けた。

「ご飯、食べに行くつて。どこがいいか、つてお父さんが聞いたよ」

「分かった

床にペタンと座つたまま、私は答えた。
弟も、ペタンと座る。

「この家、なんか要塞みたいだなあ

しみじみとした声で、弟が言つ。

「誰かと戦つかなあ、お父さんは
そんなことも無い。」

戦う、か。

お父さんの顔色はいつも悪かった。

夜は私が寝たあとに帰ってきて、朝は私が学校に行く前に仕事を
出ていた。

「いこつか」

弟に声をかける。
弟も立ち上がる。

「『住めば都』だつて

「なにそれ」

「お母さんが溜息つきながら言つてたよ」

「ふーん」

ふーん。

お母さんは大人だけど。

それでも、お母さんはお母さんの思つ通りには生きられないのか
もしれない。

「へたよなら、三角 また来て四角」

弟が歌いだす。

それは、最近学校で流行っている歌だつた。

「四角は豆腐 豆腐は白い」

「白いはウサギ ウサギは跳ねる」

「跳ねるはカエル カエルは青い」

「青いは葉っぱ 葉っぱはゆれる」

「ゆれるは幽霊 幽霊は消える」

「消えるは電気 電気は光る」

そこで私と弟は顔を見合わせる。

「「光るはおやじのハゲ頭！」」

そう言つて大笑いした。

「おまえら～！ 誰がはげているつてえ～？」
お父さんがのそりと私たちの後ろに立つた。

そして逃げよつとした私たちを後ろからわやつと抱きしめてきた。

「うえ～！ 親父臭い～！」

私たちはそう言ひながらジタバタとした。

「なあ、ふたりとも。昼飯、何が食べたい？」

お父さんが聞く。

「「龍々軒のラーメン！」」

弟と私の声が揃つ。

その答えに、お父さんは苦笑いしながら、「じゃあ、行くか」と
言った。

お父さんが行きたいレストランよりも、今のお家の側にあるラーメン屋が一番の「」駆走だった。
そう思つて言つたけど。

だけど。

お父さんの笑つた顔を見て、今日は我慢してあげよつと思つた。

「私もレストランでもいいよ」

お父さんの背中に言つ。

お父さんがくるつと振向く。

「おつ？ そうか？」

「ラーメンのあるレストランがいいなあ」

弟がそんなことを言つ。

「ラーメンは、そうだなあ。じゃあ、中華のレストランにいくか？」

お父さんの顔がぱつと明るくなつた。

大人も、結構大変なかもしれない。
なんか、そう思つた。

新しい車の匂いが嫌で、窓を開ける。
目に映る景色が、びゅんびゅん移動する。

一瞬。

大好きな今の家の側の風景が、窓の向こうから飛び込んできた。

もうすぐしたら、あそこには帰れなくて。
あそこは、本当にただ前を過ぎる景色の一つになるんだろうなあ、
と思った。

そして、私があそこからいなくなつても、何が変るといつひととも
もなくみんなそれそれで遊んでいいのだひつ。

そう思ひ、悲しくなつた。

でも、一人でこのまま今の家に住み続けるわけにはいかない。

弟は私がいないと宿題をやらなーいし、お母さんだつて私がいない
と淋しいと思う。

お父さんは、私がいてもいなくとも、どうなのかは分らないけれど。

けど。

中華のレストランに行くには、人数が多いほうが多いと思ひこむ。

さよなら三角
またきて四角。

遠くなる景色を見ながら、私はそっと口をつぶやいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5798p/>

さよなら三角

2011年4月28日12時41分発行